地域連携

長野原町に新しい芽を出そうプロジェクト
女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦
八ッ場ダムツーリズムによる地域コミュニティの再生について

――インフラ観光による地域デザインの構築とビジョン――

篠　原　　靖

A Report on Revitalizing Regional Community Project through Yamba-Dam Infrastructure Tourism Supporting by Citizens and Women University Students in Naganohara-machi, Gunma-prefecture.

Yasushi SHINOHARA

要　旨：群馬県長野原町の八ッ場ダム建設工事は65年間の歳月を経て2019年の完成に向け最終局面を迎えている。同町が抱える課題は国と政治に翻弄され、破壊された地域コミュニティの再構築であるが、住民に対する長年にわたる国の生活再建支援が１年後のダム完成とともに打ち切りとなるため、現在、ダム完成後の住民の生活自立と持続可能な地域振興策の確立が求められている。本稿ではこうした課題を解消するために取り組んだ産官学連携によるプロジェクトが果たした役割と成果、さらには同町の今後の観光振興と地域活性化の在り方と方向性を取りまとめた。

キーワード：インフラ観光（infra tourism）、観光対象（tourist object）、地方創生（regional revitalization）

１．八ッ場ダム建設、国と長野原町民の65年間の戦いの歴史

約70年前の1947年９月、関東地方は戦後最大級のカスリーン台風に襲われ、関東１都５県で3,520人の死傷者を出す甚大な被害が発生した。この台風を契機に国は関東平野の治水対策のため大型ダムの建設を検討をはじめ、５年の歳月を経た1952年に利根川改修計画と合わせ、吾妻川水系の八ッ場地区が候補地に選定され基礎調査が開始された。地元は唐突なこの発表に衝撃を受けるとともに、800年の歴史を持つ川原湯温泉も水没することなども判明し、地元では活発な反対運動がおこった。そして、1965年には「八ッ場ダム期成同盟」が結成され、反対陳情・署名活動が行われ県内外あわせて3000名以上が反対運動に参加するなど国と地元は泥沼の対立関係を深めることとなる。さらに地元住民側も賛成派と反対派に大きく二分され、地域コミュニティが大きく破壊された。このような環境の中、国はダム建設の代償として地権者に対し過剰とも言える生活再建案と将来ビジョンを提示し、1970年になってようやく地元との調印がなされ、国はいよいよ八ッ場ダム建設に着工した。しかし39年後の2009年、衆議院選挙において民主党が308議席を獲得し政権与党となると、国土交通大臣に就任した前原誠司元大臣はマニフェストにあった八ッ場ダム事業の中止を発表、地元は再び大混乱に陥る事になる。しかし僅か３年後の2012年に民主党はその方針を簡単に転換し再び公共事業を推進すると発表、まさしく地元は国と政治に大きく翻弄され続けた。このような環境の中で、政府は地権者の生活再建の要求に対しさらに大きな国費を投入しながら現在に至る。そして計画から約70年の歳月を経て2019年に、いよいよ八ッ場ダムが完成する。

２．国の公共事業対策で長年にわたり生活が成り立ってきた長野原町の現状と課題

八ッ場ダム建設もいよいよ１年後の2019年春の完成を目指しダム本体工事の約４割が完了し、工事は24時間体制で急ピッチで進んでいる。しかし、ここで問題になるのは１年後の完成と同時に、国土交通省の現場工事事務所も地元から撤退する事になり、これと同時に長年続いていた国からの生活支援は大幅に削減されてしまうことになる。また、工事が終了すればダム建設現場で働くゼネコンの約2000名の労働者も地元から姿を消す事になる。さらには、こうした国の職員や外部労働者の支援で維持されている400年の歴史を誇る川原湯温泉伝統の「湯かけ祭り」も継承できない事態に陥る可能性がある。今、長野原町はこの現実を直視し、今まで対立関係にあった国と地元の関係の修復、更には過去の遍歴から崩壊した地元のコミュニティの再構築を早急に行う必要性に迫られている。すなわち、ダム完成後に住民たちが自らの手で新たな代替え地で新しいコミュニティを確立する事が必須の課題なのである。

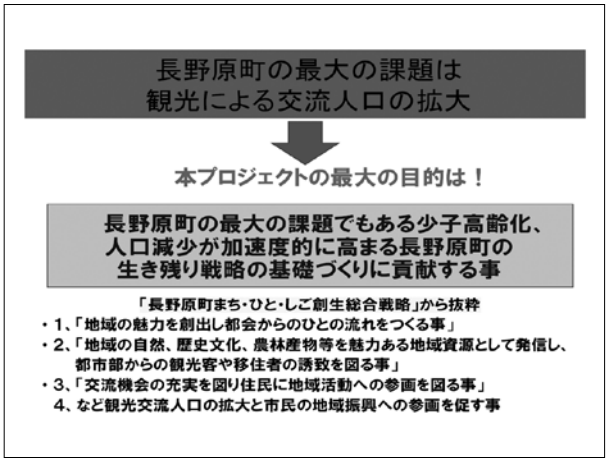
３．本学が長野原町の再生に取り組むようになったきっかけ

跡見学園はもともと長野原町に研修所を所有しており、その縁もあって本学と同町は2016年４月に相互包括協定を締結し研修所内に「長野原学研究所」を開設した。これと時を同じくして、全国で難問とされていた様々な地域活性化に産官学連携で地域課題の解決を行って来た実績を持つ筆者に対し、国土交通省幹部から完成が間近に迫った八ッ場ダムを長野原町の観光の拠点として活用できる方策および地元と国の関係を観光をベースにした地域連携で修復するために力を借りたいとの依頼があった。この２つが重なり、本学が本格的な再生計画に着手することになった。

４．産官学連携「長野原町に新しい芽を出そうプロジェクト女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦」の具体的な取り組み

このような経緯から長野原町の現状を調査した結果、同町は全国の地方町村が抱える限界集落問題に直面し、深刻な人口減少に歯止めがかけられない状況に陥っていることが判明した。

総務省、国立社会保障・人口問題研究所によると長野原町の人口は2016年１月時点で5763名、高齢化率は32.8％をキープしているが、2040年には3500名程度まで大きく減少すると推定され、高齢化率も加速度的に上昇していくと分析されている。このような現状から、長野原町は様々な定住・移住策を試みてはいるものの、現在までに大きな成果は見られていない。長野原町が作成した「長野原町まち・ひと・しごと創生戦略」によれば、町は定住人口の拡大を目指しながらも観光をはじめとした様々な事業で首都圏との交流を計り人口交流を拡大し、地域活性化行う方針が明確に打ち出されている。



(1) 本プロジェクトの目標

本プロジェクトの目標は「長野原町まち・ひと・しごと創生戦略」をはじめとする長野原町の将来ビジョンの遂行

に寄与し、特に八ッ場地区のダム完成後の自立を促進するための方策を提言し、今まで対立関係にあった国と地元の関係の修復、更には過去の経緯から崩壊した地元コミュニティの再構築を行い住民自らの意識を改革し、住民の努力で生活を自立させていくことを目標とした。

(2) プロジェクトを推進するための手順

上記目標を達成するために、筆者は国土交通省八ッ場ダム工事事務所長、および長野原町長に個別に本構想を提案したが、双方とも過去の経緯を熟知しているだけに、そう簡単に住民は動かないと提案に対しては乖離的な意見が返ってきた。双方の発言の趣旨は八ッ場地区は長年国の生活支援策で何とかここまでたどり着いたという感覚があり、自らの稼業を回していく事でいっぱいであり、自らが動いて連携したり、ダムを活用して将来ビジョンを描くことなど到底無理であるとの内容であった。こうしたやり取りの中で筆者は方向を大きく転換し住民を巻き込む前段として以下のようなアクションを起こした。

①急がば回れ、ダム観光の威力の証明を

地元の行政をはじめ町民もダム見学で人を呼べるとの認識が殆ど無いため、筆者は八ッ場ダム工事事務所長に対して知名度が全国に広がっているこの八ッ場ダムを国が推進しているインフラツーリズムのメッカとしてダム観光で人が来ることを証明して行こうと持ちかけた。そうしたところ、屈強な16代目の工事事務所長、矢崎剛吉氏から以下のような強い意志を確認した。「２年後にこの八ッ場ダムが完成し地元にダムを引き継ぎ次ぐ時が来る。多難だった過去の経緯があるもののこの八ッ場の地にダムが出来て良かったと言ってもらう事が65年間八ッ場ダムに関わった歴代の所長と職員の願いである、ついては現役の我々はどんな苦労も惜しまない」、こうした力強い覚悟を確認し（矢崎氏談）、今回の取り組みがスタートした。

②基本となる八ッ場ダムの観光価値の創造（八ッ場ダム日本一のインフラツーリズム開発計画）

政府が掲げる「明日の日本を支える観光ビジョン」の主力目標のひとつに公共施設の観光価値の創造と解放が掲げられており、観光庁を所管する国土交通省も全国のインフラ施設を観光資源として活用すべく「迎賓館の民間開放」やダムの放流を観光用に仕立てた「観光放流」の実施など従来の管理中心であった社会インフラの概念を大きく軟化させ観光集客に活用する動きが加速している。こうした追い風を見据え、先ず八ッ場ダム工事事務所と筆者との間では「八ッ場ダムを従来のダム観光の概念にとらわれる事なく日本一のインフラ観光拠点に育て上げること」を目標にすることで合意し、以下のような様々な受け入れ態勢の整備と目的別の見学シナリオを急ピッチで構築していった。

●仕掛１：ツアーブランド「やんばツアーズ」の立ち上げ

八ッ場ダム観光をブランド化するための仕掛として新たなツアーブランド「やんばツアーズ」を立ち上げた。これに合わせ全国初となるダムのロゴマークを提案、新たな八ッ場ダムのロゴマークを設定し将来的にはこのロゴを地元共有のブランドマークに育てていく構想である。

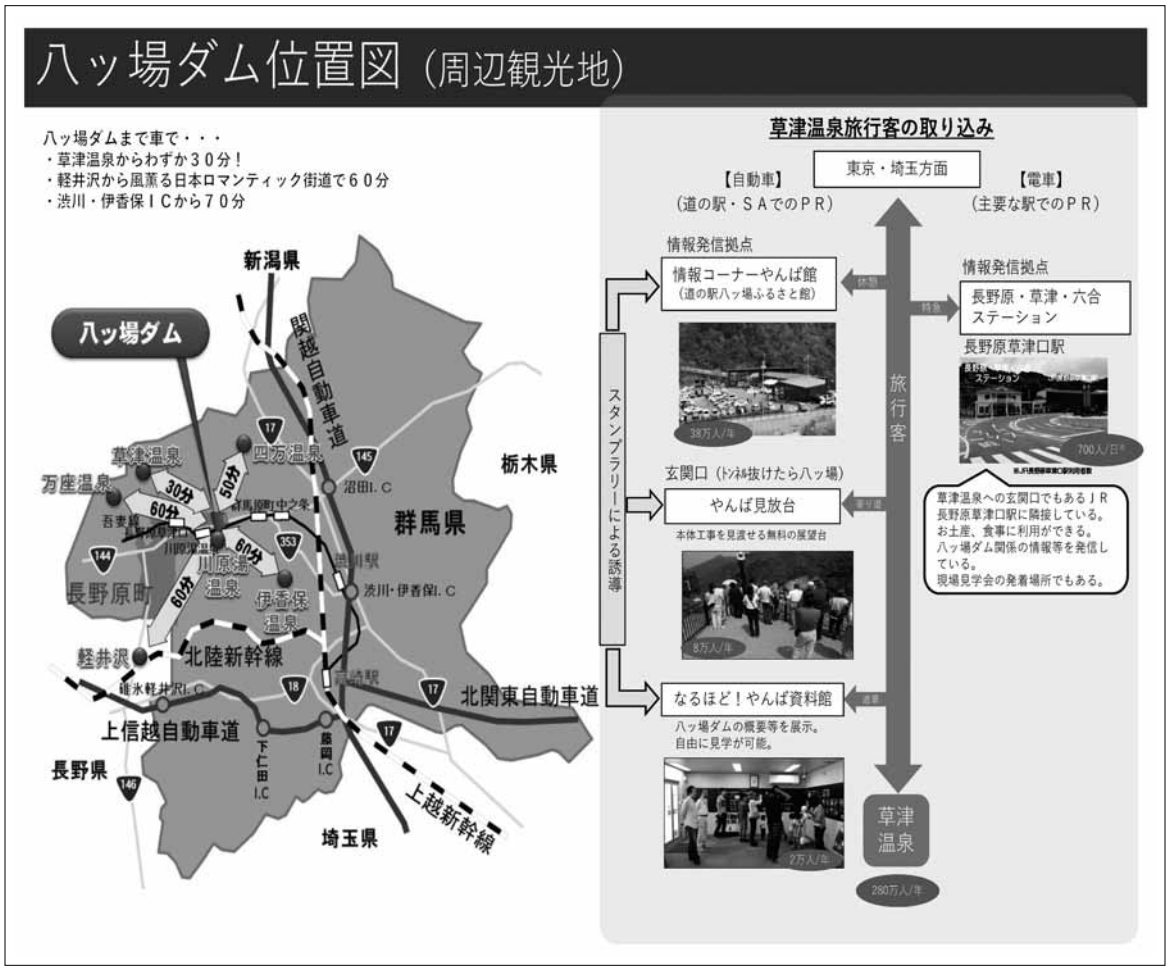
（2018年４月より運用開始予定の新ロゴマーク）

八ッ場ダム観光をブランド化するための仕掛、八ッ場ロゴの検討

八ッ場の「八」の文字と守るという意味のある八角形を掛け合わせた家紋風のロゴ。海外からの客層も見込めるので日本であるべきロゴをデザイン。様々なものから守るダムと守りの図形の八角形は「八ッ場印」としてアイキャッチに。

●仕掛２：従来のダム観光の概念を払拭する「ダム観光５つの進化と10の目的別ツアー」の開発

八ッ場ダムを日本一のインフラツーリズムの本拠地として、かつてない大胆なインフラ観光拠点に成長させるため、八ッ場ダム見学を旅行会社の商品開発同様の厳しいこだわりの基準を定め「客層別」、「目的別」にセグメント化した斬新なダム観光商品「ダム観光５つの進化と10の目的別ツアー」の開発を行った。



出典：国土交通省八ッ場ダム工事事務所

ア、やんばツアーズ５つの進化

●進化１：新登場！ご案内役「やんばコンシェルジュ」誕生！

日本一のダム観光を実践するためには質の高いガイドが求められるため、お客様を楽しくご案内する「やんばコンシェルジュ」制度を考案した。同コンシェルジュは「やんばツアーズ」の基本マインドである「明るく楽しく」をモットーに、従来インフラ観光のお決まりの治水と工事工法の案内のみではなく、長野原町や近隣の草津温泉や軽井沢に至る広範囲の観光情報をお客様にご提供し、八ッ場ダム建設の経緯やこれまでの歴史をドラマ仕立てでご案内する仕組みを構築した。

活躍中のやんばコンシェルジュ

●進化２：日本一！インフラ観光ツアーを目的別に楽しめる10本の見学プランを造成

進化したダム観光を実現させるためには顧客の細かいニーズを把握することが不可欠であり、旅行商品造成の基本である「個人向け」、「団体向け」の２つの柱を立て季節感を色濃く打ち出し、リピータの獲得も可能な商品づくりを行った。また、商品づくりにおいては、「今この季節の八ッ場を」、「他にはマネのできない八ッ場だけの」、「あなただけ特別に」を基本コンセプトにした。詳しくは以下、「やんばツアーズ日本初10の目的別ツアー」目的別ツアー内容を参照のこと。

●進化３：日本でここだけ！八ッ場ダムならではの体験と見学記念特典開発

工事の進捗に応じて、図柄が変わる八ッ場ダムを紹介するオリジナルダムカードの制作や縁起物オリジナル記念品（お守り）を考案した。その名は「八基石」、巨大な八ッ場ダムを支える基盤の石で、コンクリート打設直前に谷底か

ら掘り出した貴重な石（二度と掘り出すことはできない）を八ッ場ダムの「八」は次第に栄えることを意味する“末広がり”であり、ダムの形に合わせ掘削し、さらにはこの「八基石」を川原湯温泉の源泉でお清めし、地元の川原湯温泉神社でのお祓いを済ませたこだわりの特典品である。非売品でありツアーに参加したお客様だけが手に入る仕組みとした。

●ダムカード
工事の進捗に応じて、図柄が変わるオリジナルダムカードを作成し地元の買い物特典も付与。

●「八基石」（はっきせき）
巨大な八ッ場ダムを支える基盤の石を掘削、地元の川原湯温泉神社でのお祓いを済ませたこだわりの特典品です。非売品でツアー参加者のみにプレゼント。

●進化４：ダム見学受け入れ体制を10倍に増強

平成28年４月時点の受け入れ可能人数は月最大500人であったがコンシェルジュの導入に合わせて平成29年４月時点の受け入れ体制を月最大5000人に大幅に改善した。29年度は夏以降数々のメディア戦略も功を奏して年内の見学ツアー枠はほぼ完売した。

●進化５：全国の鉄道・バス会社、旅行会社、学校、さらには地元観光地との連携を強化

従来、国が主催するインフラツアーは約３か月前にならないと諸般の事情により内容を発表出来なかったが、本やんばツアーズではこの常識を払拭した。半年以上前に年間のツアー計画を幅広く開示し旅行会社の商品造成と連携を強化し、昨年度は受け入れを行っていなかった会員募集型企画旅行の受け入れも成功し、全国の旅行会社で八ッ場ダム見学ツアーが企画発売された。また合わせて着地型見学ツアーも地元バス会社の協力により発売され、草津温泉発の八ッ場ダム見学ツアーが好評を博した。この商品をベースに旅行業各社に代理販売を依頼し、宿泊型旅行商品のオプショナルツアーとして拡販させ、特に大手旅行会社（JTB・日本旅行・近畿日本ツーリスト・東武トップツアー・JR びゅう等）を通した全国網の販売体制が確立した。

＊地元関越交通が通年企画した草津温泉発地型旅行商品とダム工事事務所 HP でも PR を開始した。

イ、インフラ観光の新たなステージへ「やんばツアーズ日本初10の目的別ツアー」

進化したダム観光は、お客様の細かいニーズを把握することが大切であり、それは旅行商品造成の基本でもある。「個人向け」、「団体向け」の２つの柱を立て季節感を色濃く打ち出した商品づくりを行った。

★個人向け FIT 企画（１～20名）

●個人＝目的別１：［通年スタンダード企画］八ッ場の今を巡る現場見学会

満員御礼！　大ブームとなった八ッ場ダムメイン工事見学会！新たに代替地に移設した新川原湯温泉を中心にした八ッ場地区の街並みを迫力あるダム工事現場の見学とセットでコンシェルジュが御案内するスタンダードツアー。従来インフラ観光のお決まりの治水と工事工法の案内のみではなく長野原町や草津温泉更には軽井沢に至る広範囲の観光情報を顧客に提供。八ッ場建設の経緯やこれまでの歴史をドラマ仕立てで案内する。

●個人＝目的別２：［期間限定・蛍光企画］ホタル観賞と夜間工事見学会

初夏に舞う蛍の光を吾妻川に流れ込む小川で観賞し夜間工事現場へ。蛍とダム夜景との光の競演をお楽しみいただくオリジナル企画。夜間催行のツアーは地元川原湯温泉の宿泊に貢献する。

●個人＝目的別３：［期間限定・紅葉企画］吾妻峡の紅葉とダム見学会

名勝“吾妻峡”が燃える秋。紅葉を抜けると…突然現る巨大なダム工事の迫力をコンシェルジュと廃線となった旧吾妻線の線路を歩いて八ッ場の秋を堪能する大人気のツアー、見学後は川原湯温泉源泉の「大湯」で汗を流すツアー。

●個人＝目的別４：［期間限定・人口樹氷企画）真冬の新名物！樹氷とダム見学会

人口樹氷「やんばモンスター新登場！」やんば冬の新名物“氷の樹”ライトアップと冬の「ダム夜景」をセットで楽しむ八ッ場ダム工事事務所スタッフの努力の傑作。冬場 OFF 対策を視野に開発。

●個人＝目的別５：［会員限定・ダム愛好家専用］八ッ場ダムファン倶楽部特別見学会

全国のダムファン集合！「八ッ場ダムファン倶楽部」を組織し、全国のダムマニアの皆さんを単独ダムで組織化。会員の意見を取り入れマニアが唸る特別見学ツアーを実施、全国からダムマニアが殺到している。

★団体グループ向け企画（10～100名）

●団体＝目的別１［通年：一般団体向け］スタンダードやんばコンシェルジュ御案内ツアー

八ッ場ダムの歴史や治水の大切さを普段立ち入ることができない工事現場でコンシェルジュが御案内するツアー。従来インフラ観光のお決まりの治水と工事工法の案内のみではなく長野原町をはじめ近隣の草津温泉や軽井沢をはじめ広くは群馬県広域の観光情報を顧客に提供。八ッ場建設の経緯やこれまでの歴史をドラマ仕立てで案内する。＊個人向けのツアーをベースにしているが顧客の分類（慰安旅行用・会員募集型ツアー用・視察研修用等）、TPO に合わせて複数の案内シナリオを用意。

●団体＝目的２：［通年：土木技術者・土木系学生向け］最先端技術の八ッ場ダム見学ツアー

ダムの建設の最新技術「巡航 RCD 工法」の現場を普段立ち入ることができない見学ポイントをチョイスし、ゼネコン専門のコンシェルジュがご案内する専門家も納得のツアー。

●団体＝目的３［通年インバウンド向け］：訪日外国人向け Yamba Inbound ツアー

ようこそ日本へ！川原湯温泉の宿泊とセットで八ッ場ダムの工事現場を語学堪能なコンシェルジュの案内で見学し、日本の高度な治水対策やダム建設の技術をわかりやすく見学できるツアー。

●団体＝目的４［通年：小・中学生向け］教育旅行まるごとやんば体験ツアー

八ッ場ダムオリジナルの教育旅行プログラム。従来の治水を勉強する単なる教育旅行に終わらせず、「まちづくり学習コース」とダム模型をつくりながらダムの仕組みを学ぶ「治水体験コース」の２本を用意。いずれも体験型学習企画として首都圏の教育委員会や学校側に提案。公共事業の大切さだけはなく、その工事のために故郷を失う人々の気持ちや新たな長野原町のチャレンジを子供たちに伝える高度な教育旅行企画。

●団体＝目的５［通年：プレミアムフライデー］プレミアムフライデー限定ヤンバナイトツアー

お仕事終わりにダム見学！工場夜景に匹敵するダム夜景。プレミアムな日にプレミアムな夜のダム建設現場を特別解放するツアー。

５．徹底的なマスコミプロモーションの成果

上述の各種の仕掛けを具現化するとともに、世の中に告知するため徹底したメディア戦略を実施した。地元群馬県記者クラブだけに止まらず国土交通省本省、文部科学省本省、東京都庁等の各記者クラブ等へのリリース配信と訪問セールスを合計６回実施したが、こうした努力もありこれらのツアーは合計50本を超える媒体（テレビ、新聞、雑誌等のメディア）で大きく取り上げられ、「八ッ場ダム」の名は久しぶりに全国に響き渡った。今までの首都圏からの見学者に加え、九州、北海道を含む遠距離からの見学者も飛躍的に増大している。

＊50を超えるメディアで紹介。毎日新聞掲載例

６．実を結んだ集客実績について

16年度と17年度ではツアー内容が同一で無いため単純な比較は難しいが、17年度４～11月の個人向け現場見学会には前年同月比2.8倍の約5,400人がツアーに参加、さらに団体向けツアーに至っては120倍の約12,000人が「やんばツアーズ」に参加した。

７．新たな展開の舞台へ（長野原町と国との意思疎通・地域再生の新たな舞台へ）

上記の集客実績を新聞各紙が取り上げたところ、地元からは驚嘆の声があがった。町民も現実の訪問者数として18,000名を上回る実績を改めて確認し、役場も町民もこのチャンスを生かしたいという土壌が一気に形成された。ここで筆者は行政と地元地権者の代表の皆さんとの意見交換の場を提案した。参加した地元の若きリーダーである川原湯温泉協会長の樋田省三氏から「地元としても、これほど多くの観光客が訪れているのに、地元にお金を落とす仕組みすらない事はあまりにもったいない」との意見が出された。筆者からの提案で２年半後にダムが完成し、国土交通省が現状のような支援を終了し、工事事務所も撤退するという現実の中で、町民自らがこのチャンスに動き出すことが最も大切であるとの内容で様々な可能性が議論された。そして、年内に地元の有志で組織する地域連携を目的にした「チームやんば」の結成に向けても議論がおよびその実現に向けて動き出す事となった。このように今回の初期の仕掛けであった「やんばツアーズ」の成功が結果的に大きな転機となり、長野原町の現状を地元の皆さんが再認識し、役場、町民、国の三者がそれぞれの立ち位置を明確に確認し新しい長野原町の未来に向けた大きな一歩を踏み出すこととなった。

８．本学の観光教育の実践の舞台として企画した「長野原町に新しい芽を出そう プロジェクト女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦」

以上のようにツアーブランド化と地元の意識変革が順調に進むなか、学生が参画した「長野原町に新しい芽を出そうプロジェクト女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦」も行われた。以下、このプロジェクトについて述べる。

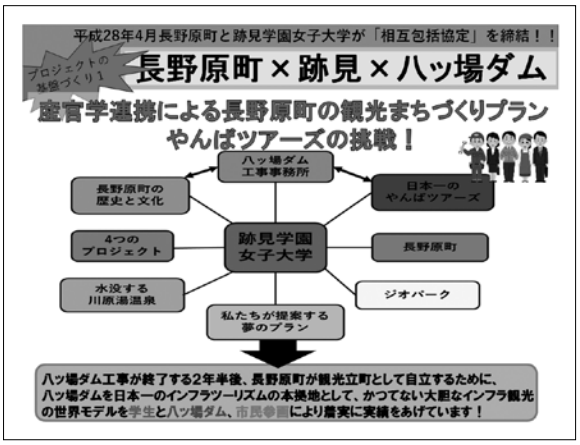
(1) 17年度のゼミ活動重点支援地域を長野原町に決定。

筆者の担当するゼミには将来、観光産業に就業を希望する３・４年生の学生を中心に、約30名ほどが在籍している。ゼミでは学生の希望を聞きながら、毎年重点支援地域を選定している（昨年は観光庁の事業で北海道利尻富士町の離島振興策の策定に学生と現地合宿を実施）。本年度は、包括協定がある長野原町を舞台にした八ッ場ダムを活用した同町の地域振興をベースに活動を展開することを学生の合意で決定した。

①具体的な取り組み計画

ア．事前調査期間（17年３月～５月２か月間）

先ず学生たちは現地に足を運ぶ前の事前調査として、長野原町の地理や歴史、文化、更には八ッ場ダム建設にまつわる経緯や国と地元、地元内での反対派、賛成派の分裂の歴史やその背景に関してグループ別にテーマを決めて調査を行った。また、ゼミ授業時間内で内で研究テーマ毎に発表を行い、長野原町や八ッ場ダムについての知識を深めた。



＊学生が描いた概念図。

イ．学内研究　外部講師の招へい（５月～６月）

地元長野原町役場の幹部、川原湯温泉協会長、国土交通省八ッ場ダム工事事務所長等を外部講師として大学に招へいし、事前学習で整理した様々な情報を再度整理するとともに、立体的に八ッ場ダムの建設や長野原町がおかれている現状を学習した。学生たちは長野原町の歴史と実情を深く知れば知るほど地元の人々の心情を理解するようになった。その後も学生たちは何回も自主的にゼミを行い、各プロジェクトごと真剣に議論を重ねた。そのうえで学生たちが出した答えは、「過去の経緯でばらばらになっている長野原町のコミュニティを一つにする」というものであり、これが合宿のテーマとなった。

ウ．学生の現地事前調査と長野原合宿（７月～９月）

６月になり夏合宿に備えた現地調査を２回実施し、現地では地元住民から暖かい歓迎を受けつつ意見交換を実施し、結果下記の４つのプロジェクトについて、地元の若者を中心に夏合宿中に立ち上げることで合意した。

（ア）八ッ場ダムコンシェルジュプロジェクト

八ッ場ダムを日本一のインフラツーリズムに育て上げ、八ッ場ダムと長野原町の他の観光資源との連携をはかり、更にはダム見学者が地元にお金を落とす仕組みまでを考案する基幹プロジェクトである。まず学生が取り組んだのは、「やんばツアーズ」と長野原町が新たな観光資源として売り出している一昨年秋に日本ジオパークに認定された「浅間山麓ジオパーク」とを連携させ、観光客が長野原町内を広域で回遊し宿泊滞在する仕組みを提案する企画造成にチャレンジすることであった。これ以外にも、女子大生がダムコンシェルジュとしてデビューするための研修を行い、合宿期間中は現場で一般のお客様への案内業務にチャレンジした。そして、国土交通省八ッ場ダム工事事務所が認定する「やんばコンシェルジュ」の認定試験に参加学生12名がチャレンジし、全員が合格し認定書を受け取った。また、学生と一緒に川原湯温泉の若手後継者たちもマイクを握り「やんばコンシェルジュ」認定に挑戦し、地元ガイドならではの川原湯温泉の過去の歴史や子供のころ遊んだ我がふるさとの思い出話、そしてまもなく故郷がダム湖の湖底に沈む現在の心境を語ったのであるが、その案内は見学者の心を打った。そして歴史に残る長野原町民のやんばコンシェルジュ第一号が誕生した。

（イ）川原湯温泉ブランド化・リピーター拡大プロジェクト

若者目線でアイディアを出し、新たな川原湯温泉が八ッ場ダムと共生し長野原町の核となることを目指すプロジェクトである。川原湯温泉の若手経営者と学生が協働ワークショップを開催し、若者も楽しめる温泉街としての景観整備など、「川原湯温泉まちづくりプラン」を作成した。また、今までばらばらであった長野原観光協会・川原湯温泉協会・北軽井沢観光協会の３つの協会を連携させることによって滞在時間を延ばし、宿泊拡大の仕組み作り出す提案などを行った。

（ウ）「酒蔵・地酒ツーリズム研究プロジェクト」

地元に140年以上の歴史をもつ浅間酒造を新たな観光拠点としてとらえ、オリジナル酒造ツーリズムを通して、新たな魅力発信につなげていく事をベースに活動した。いわば、浅間酒造のブランド化を目指すものである。浅間酒造のブランドを全国に浸透させるために従来は一般開放を行っていなかった酒蔵を開放し、浅間酒造のこだわりの酒造りを広くPRするための見学ツアーを学生たちが企画し合宿期間中モニターツアーを実施したが、参加者から大好評を博すことができた。

（エ）「道の駅やんばふるさと館活性化プロジェクト」

道の駅やんばふるさと館をダム観光の拠点とし、新たな観光拠点となる日本一の道の駅に成長させることを目的にした活動である。周辺施設と町民の方々との連携で、道の駅「八ッ場ふるさと館」を八ッ場ダム観光のプラットフォームに成長させるための支援を行った。具体的には同駅のブランド化を図るために、商品パッケージの改良・販売促進POPの作成をはじめ、レンタサイクルの活用で周辺の施設と連携するための新たなレンタサイクリングシステム提案やオリジナルマップの作成を行った。また、学生からは地域連携企画として同駅で有名になった名物「八ッ場ダムカレー」をさらに進化させるため長野原町の季節ごとの特産品を具に使用した四季の移ろいが感じられる「オリジナル八ッ場ダムカレー」の提案や長野原町全体の飲食店でダムを売り出すために「長野原町ダムカレーバトル」の開催などが提案された。

エ．夏合宿の成果

学生たちは以上の４つのプロジェクトに分かれ、総勢32名が交代で９日間にわたり合宿を催行した。各プロジェクトでは地元住民と学生との間で数々のドラマが生まれ、学生たちは大学の座学で学んだ地域活性化の理論だけでは現実の課題解決には到底至らず、現実の難しさや厳しさや様々な障壁を突破する方法を体得した。合宿が終了した際に彼女等からは、今夏のプロジェクトを通し学べた事は、地元の方の情熱を現実の形に作り上げていくことの難しさや、その手法はテクニックでは無く「大好きなこのまちを自分たちの手で存続させると言う強い思い」がすべての原点に無くては解決できない事が良く理解できたとの声が聞こえた。

現在も学生と地元で企画が進んでいるコンシェルジュの新ユニホームとブランドお土産の開発

９．2017年度「大学生観光まちづくりコンテスト」で観光庁長官賞をはじめ４賞を同時受賞および長野原町から授与された感謝状

筆者の担当しているゼミ、「旅行企画の基礎と地域振興マネージメント」では学外の団体が主催する観光関連コンテストへの積極的なチャレンジが毎年恒例になっており、それがゼミ学生たちのステータスになっている。歴代のゼミ生たちも全国区の大学と他流試合を経験することで高度な企画力やプレゼンテーション能力が培われ、入賞まで様々な苦労を経験し大きく成長し観光業界に巣立っている。今年は本プロジェクトの取り組みと実績をベースに、観光庁や文部科学省が後援する2017年度「全国大学生観光まちづくりコンテスト」にチャレンジし、八ッ場ダムを観光資源の核にした長野原町の地域活性化企画を提案したところ、その企画力とプレゼンテーション力が高く評価され、応募の60大学90本の応募企画の中から全国グランプリの観光庁長官賞をはじめ見事下記の４賞を受賞することが出来た。

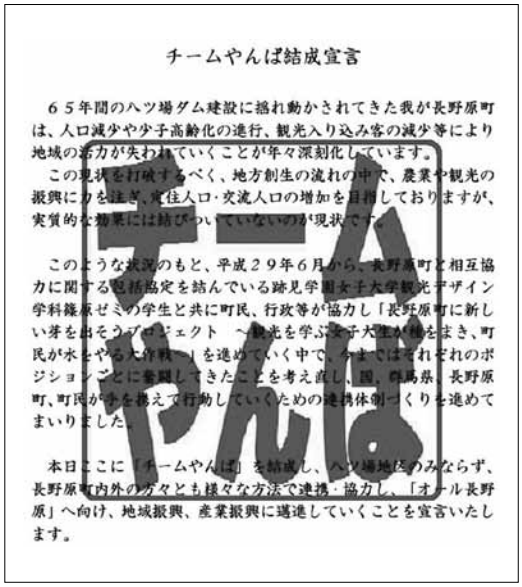
（1）観光庁長官賞（観光まちづくり全国最優秀グランプリ）
（2）観光リノベーション賞（新たな発想で地域を変革した成功例として評価）
（3）水資源機構賞（国土交通省が推進する水辺リング、水辺の優れた活用提案が評価）
（4）パフォーマンス賞（優れたプレゼンテーションを行ったチームを来場者の投票で決定）

さらに長野原町からは本取り組みへの感謝状が授与された。

＊表彰を受ける学生たち

10. インフラ観光による地域デザインの構築とビジョン

今回の成果は観光教育の基礎となる観光による地域コミュニティの構築を正面から受け止め、学生たちが地元住民とともに築き上げた努力に他ならない。2017年11月16日に実施された本プロジェクトの最終シンポジウムでは、１年前には想像もできなかった国と地元とのコミュニティが確立され、長野原町全体が改めて地域連携の重要性を認識するに至った。今までバラバラであった組織や人々が、川原湯温泉協会長の樋田省三氏の構想の通り、この最終シンポジウム会場にて「チームやんば」が正式に結成され、活動を開始することになった。シンポジウム当日は「チームやんば」の結成宣言が満場一致で可決され、下記の宣言文がメンバーから萩原町長に手渡された。この「チームやんば」のメンバー構成は画期的で「国土交通省八ッ場ダム工事事務所」、「長野原町」、「浅間酒造」、「道の駅八ッ場ふるさと館」、「商工会」、「北軽井沢観光協会」など縦と横のコミュニティが一つにつながり、皆が同じ土俵で10年後の長野原町の姿を熱く語る姿は感動的であった。

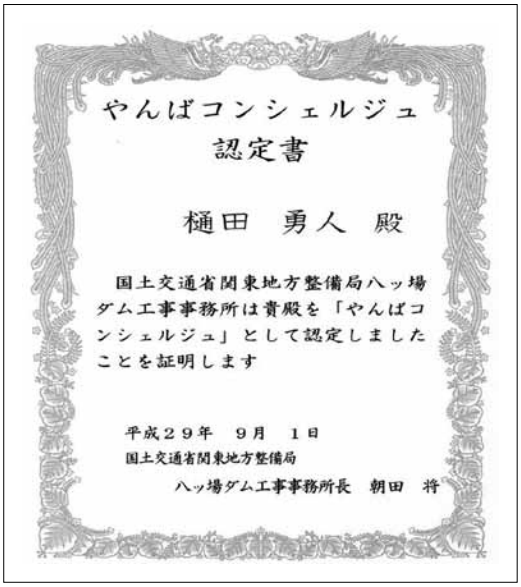

チームやんば結成宣言

６５年間の八ツ場ダム建設に揺れ動かされてきた我が長野原町は、人口減少や少子高齢化の進行、観光入り込み客の減少等により地域の活力が失われていくことが年々深刻化しています。
この現状を打破するべく、地方創生の流れの中で、農業や観光の振興に力を注ぎ、定住人口・交流人口の増加を目指しておりますが、実質的な効果には結びついていないのが現状です。

このような状況のもと、平成２９年６月から、長野原町と相互協力に関する包括協定を結んでいる跡見学園女子大学観光デザイン学科篠原ゼミの学生と共に町民、行政等が協力し「長野原町に新しい芽を出そうプロジェクト　～観光を学ぶ女子大生が種をまき、町民が水をやる大作戦～」を進めていく中で、今までばらばらのそれぞれのポジションごとに奮闘してきたことを考え直し、国、群馬県、長野原町、町民が今を捉えて行動していくための連携体制づくりを進めてまいりました。

本日ここに「チームやんば」を結成し、八ツ場地区のみならず、長野原町内外の方々とも様々な方法で連携・協力し、「オール長野原」へ向け、地域振興、産業振興に邁進していくことを宣言いたします。

サンプル


やんばコンシェルジュ
認定書

樋田　勇人　殿

国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所は貴殿を「やんばコンシェルジュ」として認定しましたことを証明します

平成２９年　９月　１日
国土交通省関東地方整備局
八ッ場ダム工事事務所長　朝田　将

今回学生たちが取り組んだ本プロジェクトを通して、我々は余所者として率直な意見具申を行い最終的には地元の接着剤のような役割を果たせたのではないかと実感している。また、学生たちがガイド教本を一生懸命に暗記しながら「やんばダムコンシェルジュ」を務めたことが地元への大きな刺激となり、ダム建設に反対していた地元住民もコンシェルジュに挑戦し、新たに認定ガイドの資格を取得した。まさに産官学連携による化学反応が起こったのだ。今後も八ッ場ダムを観光資源として地域の核に位置付けながら、各団体が連携を行い消費の拡大、さらには宿泊客の増大が出来れば長野原町の未来は明るいと感じている。今回のプロジェクトは持続的な観光振興のスタートラインに立ったに過ぎないが、国と町そして住民が同じテーブルで夢を語りながら会議を重ねているということは65年間の歴史の中で大きな第一歩である。今年も「やんばツアーズ」の観光客数は右肩上がりだが、早急に浅間山麓ジオパークや北軽井沢との連携を図り、観光客の滞在時間を延ばし、長野原町に多くのお金を落としてもらえるような仕組みを

考える事が重要である。今後も「チームやんば」の活動を暖かく見守り、そして更なる支援を行っていきたい。

以上

謝辞

本稿を作成するにあたり、この一年間お世話になった長野原町萩原睦男町長、長野原町役場中村剛企画課長、川原湯温泉協会樋田省三会長、道の駅八ッ場ふるさと館篠原茂社長、浅間酒造株式会社櫻井武社長、国土交通省八ッ場ダム工事事務所16代矢崎剛吉所長、同17代朝田将所長、同由井修二副所長、同藤枝達也地域振興課長をはじめ多くの長野原町の皆様のご協力とご支援をいただきました事を心より御礼を申し上げます。

参考文献

●嶋津暉之／清澤洋子『八ッ場ダム 過去、現在、そして未来』（岩波書店．2011年）
●宮原田綾香『それでも八ッ場ダムは作ってはいけない』（芙蓉書房出版．2010年）
●水源開発問題全国連絡会―ダム問題とは
http://suigenren.jp/damproblem/probrem1/（2017年10月）
●ダムと環境
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%A0%E3%81%A8%E7%92%B0%E5%A2%83（2017年10月）
●国土交通省関東地方整備局―河川　あなたと見つめる関東の川づくり
http://www.ktr.mlit.go.jp/river/bousai/river_bousai00000006.html（2017年11月）
●カスリーン台風
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%B3%E5%8F%B0%E9%A2%A8（2017年11月）
●地方国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務―カスリーン台風
http://www.ktr.mlit.go.jp/yanba/yanba_kouzui01.html（2017年11月）
●長野原町人口ビジョン 長野原町まち・ひと・しごと創生総合戦
http://www1.town.naganohara.gunma.jp/www/contents/1464147450226/files/jinnkouvision_sougousennryaku.pdf（2017年11月）
●長野原町ホームページ
http://www1.town.naganohara.gunma.jp/www/contents/1460080608928/index.html（2017年11月）
●国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所―やんばツアーズ
http://www.ktr.mlit.go.jp/yanba/yanba_index059.html（2017年12月）
●利根川上流河川事務所
http://www.ktr.mlit.go.jp/tonesui/tonesui00033.html（2017年12月）